

素敵な出会い

新年の挨拶文の中で、「自分が孤立してある限り苦しみは終わらない」と書きました。それに関してお話ししたいことがあります。

2012年11月初めにつけた日誌の中にこんなことが書いてありました。

11月何日かになって苦しい気持ちの日が続いた。
夢の中で額に水をつけなさいと言われた時の字分けで「額」をヒタイと読む他、ガクと読んだ。あれはまだ続いている。

額 ガク 我苦しむ

謂れない苦しみの体験。無力感。ひとりで自室にいる時、誰もそばにいないから遠慮なく叫びだしたいくらいの苦しさを味わっていた。一晩中眠ることができず、頭が重く口の中が乾いて気分が悪かったが、何故か今日11月14日は出かけるべきだと感じていた。

さて、2012年11月14日に起きたお話をします。

「感謝の日」というイベントに出かける途上、駅から会場へ向かうタクシーに乗った。乗ったとたんに運転手さんが、
「今日は良いですね」と言う。きらめくような青空が車のフロントガラス越しに見えたので、

「青空がきれいで、気持ちが良いですね」と答えると

「私はね、天気でも曇りでも青空でなくても幸せなんです。実はね、今日は特に幸せなんです。もう幸せで楽しくてどうしていいか分からなくて、こんな見ず知らずのお客さんにこんなこと言ってしまっているんです。すみません」と言う。

「まあ幸せなんて素晴らしい。私もおすそ分けに預かって嬉しいです。いつからそんな風になったのですか」とふと、聞いてしまった。

さて、かいつまんで言うと、

小さなころ農家に生まれた。両親は優しい人たちで、貧乏だったけれど、畑があるので食べ物はちゃんと食べれた。都会は食糧不足の時代だったのに、田舎だったので食べるものがあることがありがたかった。親は週に一回は魚も買ってきて子供たちの栄養にと食べさせてくれた。美味しくて美味しくて嬉しかった。そんな恵まれた育ちだったのに、何故かある時、たしか高校の終わりの頃にふと、

「自分は何の為に生まれて来たのだろうか」という疑問を持った。その答えを求めていくうちに後から後から疑問が湧いてきて、誰に聞いても教えてくれないので、答えを求めて放浪をした。まともな仕事にも就かず浮浪者のようにさまよったが、いつまでたっても答えは見つからなかった。親にも兄弟にも親類にも友達にも見離され、独りさまよい、苦しんで何十年も過ぎた。どん底まで落ちた。死ぬより辛い苦しい中を何故か死ねずに生きていた。そしてある時ふと楽になった。勿論悟りなんて状態なんかとは全然違うとは思いますが、苦しみが終わった。そして今こうして毎日幸せで楽しくて、今日みたいに踊りだしたいくらいの時もあるような日々を送っている。

聞いているうちに私もすっかり幸せになってしまった。幸せな人が人を幸せにする力を持っているのです。素敵な出会いをありがとうございます。